
桜花

カサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花

【著者名】

カサ

【ZPDF】

Z7384D

【あらすじ】

5年ぶりに友人の結婚式に参列するために大学がある沖縄にやつてきた。披露宴の2次会を楽しんでいた私に面会人がきた。話は6年前にさかのぼつてゆく。

(前書き)

もう学校が始まっている時間なのに、コンビニで立ち読みしている中学生や、制服のままくわえタバコで闊歩している女学生をあちこちで見るような気がします。そんな人たちに読んでもらいたい実話系のお話です。

いつたん卒業してしまうと、好きな母校とは言え、1800kmも離れていては、そうそう同窓会や集まりにも行けない。大学を卒業し、故郷の企業に入社した私は、5年ぶりに大学のある沖縄に行く機会に恵まれた。親しい同級生の結婚披露宴へ参加するのが目的だ。参加者の多くは地元沖縄なのだが、私のように本土からの参加者もいるので、ちょっとした同窓会のような感覚である。

こんな事でもないと沖縄に行くことはない。大学時代の友人たちと、ゆっくり過ごしたかったので、披露宴の前日に沖縄入りして、親しい友人らと会う約束をしていた。彼らの仕事が終わるのは夕方5時、、、飛行機の都合で早めに着いた私は、久しぶりの学び舎、大学に行つてみた。

卒業して5年も経つと変わらないはずの校舎も、どことなくよそよそしく感じる。行き交う学生たちも、見知らぬオジさんが当たり前の顔をして、学内をうろついているのに違和感をおぼえる様子だ。思えば入学した時も今くらいの春で、桜の並木道を花びらのカーテンをぐぐつて登校したものだ。今からもう10年ほども前の事で、あの時は不安や希望に満ちて歩いていたのを思い出し、少し恥ずかしい気持ちになった。

夕方6時になり、友人の金武の家に行つてみた。

「「んにちは、 、 、 金武くん、 いますか？」

「おうおひ、 佐藤！ よく来た。 よく来た。 元気そうだな。」

「金武～、 お前、 太つただろ？」

「ははは、 ビールの飲みすぎなんだな。 今日はちょっと遠いけど、 小録おろくの赤提灯の店に集合なんだよ。 そろそろ出掛けないといかんな。」

「小録？ ああ、 じゃあ、 姉御も来るンやね。」

「そりなんよ。 みんなが集合するのは久しぶりやん。 会いたいって も。 でも今日は花嫁衣裳じゃないぞ。」

会場に着き、 広間に通されると、 まだ集合時間前なのに 10人ほどが集まっていた。 みんな懐かしい顔、 声、 過ぎ去った5年間なんてなかつたかのように笑顔になれる。 時間を惜しむように話が弾む。

「佐藤、 やはり来ていたか。 お前は姉御に入一倍世話になつてたから、 今日は来てると思つたよ。」

「お、 嶺井、 、 、 うん、 同級生つてのはいいものだな。 何年経つても変わらない関係でいられるものな。」

「実はな、 僕つて今、 銀行の融資係をしてるんよ。 それで取引先の奥さんがお前を知つていたんだよ。」

「えー、 誰だろ？ 大学の知り合いかな？」

「いや、 その奥さんは21歳、 、 俺たちが在学していた時は中学生くらいのはずだ。」

「んー、 じゃあ、 塾の教え子かな？ 家庭教師先の生徒かな？ 名前はなんて言つの？」

「旧姓は 川満かわみつ 直美なおみ つて言ひらしい。」

「川満さん？ うつむ、 もう5～6年前の事だから忘れたなあ。」

「いや、 直接の生徒じゃないんよ。 お前、 製菓工場に家庭教師した事なかつたか？ 双子の男の中学生や。」

「ああ、 うんうん、 覚えてるよ。 テキの悪い子たちで2人とも第一

志望の高校に落ちちゃつたなあ。あーあの時の、、、「

思い出したか?」

「ああ、うん、川満つて苗字だったのか、直美ちゃん。あの子は絶対に忘れられんよ。」

直美と書ひ名前を聞いて、切れていた記憶が一氣によみがえってきた。

家庭教師のバイトは時間当たりの割が良いのと、教え終わつた後に夕食をご馳走になれる。食堂や弁当ばかりの一人暮らしの学生には、家庭料理が味わえると言うオマケ付きのおいしいバイトで、塾の講師もしていた私には塾経由で家庭教師の仕事も効率よく回つてきていったのだ。

私が大学3年の後期に行つてた家庭教師先は製菓工場を営む家で、個人にしては大きな工場で、1階が作業場、2階と3階が自宅になつていた。担当したのは中学3年生の双子だったのだが、どうにもやる気がなく覚えが悪い子供たちで、仕事だと割り切つて教えていた。

週3回のバイトは夕方6時から8時まで、2時間きつちり教えて食事させてもらい、8時半くらいに帰るのだ。6時に来た時は工場は稼働中で、甘い匂いと機械の音や従業員さんたちの声が聞こえるけれど、帰るときは作業は終わつてシャッターも閉まつて静かなものである。

いつものようにつまらない双子の相手をして階段を降りて、バイトに荷物を括つていると工場の裏口が開いて声をかけてきた。

「家庭教師の先生ですか?」

暗がりの中、田を凝らすと白い作業服を着た、瘦せていて田だけが
やけに大きなのが印象的な女の子だった。

「あの、英語で分からないとこがあるんですけど、みてもうえますか？」

「英語？ うん、ちょっと見せて『じらん。』

「この文とこの文です。どう訳すんですか？」

「うん、これは関係代名詞が消えている文でね、ここに *that* が
隠れているんだよ。もう一方は構文で、～～せずにないられないつ
て訳すんだ。」

「あ、そうか、わかりました。ありがとうございます。」

「いいえ、どういたしまして。君は？」

「私は工場に住んでいるんです。上の子たちは良いな。分からない
時は先生に教えてもらえるんだもん。」

「それが僕の仕事だからね。」

「どうもありがとうございました。」

寂しそうな、どこか陰があるその女の子は、教科書を閉じて立ち
上がり、工場の裏口の方へ向いた。

「先生、またみてもらっても良いですか？」

「え？ 今みたいに帰り際で良かったらね。」

「あ、良かった。君は上の子と違うから、みてあげないって言われ
たらどうしようって思つてた。」

家庭教師のバイトが俄然楽しくなった。もちろん仕事してお金をもらひるのは社長のところのデキの悪い双子なので、時間的に直美に接していられるのは10分が多い時でも20分くらいのものだが、彼女には強烈な知識欲のよつたのを感じていた。一度基本から教えたものはすぐに身につけ、簡単にステップアップしてしまう。覚えておいた方がいいと言つたものは確実にマスターしていた。教え甲斐がある優秀な生徒なのである。

「他に質問はない？でもだんだん難しい事を訊くよつになるなあ。」

「わかんないなあつて思つて学校の先生に訊こうとしても、授業が終わつたらすぐに帰らないと夕方の仕事の時間に間に合わないから、ずっと分からないままだつたんです。でも佐藤先生は仕事が終わつた後にみてもらえるから、、、。」

「ちえ、時間だけの話かあ、、ところで、工場には直美ちゃんだけしかいないの？」

「うん、工場の人たちは遅くとも6時には帰つちゃう。そしたら工場の事務机を使って宿題するの。」

「食事は？」

「売つてるお弁当。でも給湯室にガスがあるからラーメンとかそばとか作れるよ。」

「えー、なんかひどいな。上の人たちとは食べないの？」

「社長が上には来たらいけないって。」

「それじゃあ、どこで寝てるのさ？」

「こここの更衣室よ。工場の人たちが帰つたら、そこに布団をひいて寝るの。でも朝一番の人が7時につくるから、それまでに起きてなきゃいけないんだ。」

「いけないんだって、もう。だいたい、ご両親さんは？」

「あ、先生は知らないんだ。ウチは親に捨てられて、引き取られてきたの。」

「えつ親に捨てられた？」

「もともとは、両親は宮古島で小さな印刷の会社をしてて、その時はウチも親と暮らしていたんですね。でもある日、学校から帰ったら家には誰もいなくて、怖いおじさんたちが沢山でやってきて印刷工場にあつた機械や家具をみんな持つていってしまったの。」

話を聞くかぎりでは、親が仕事に失敗して夜逃げしてしまい、この子は親戚にあたる「」の社長が引き取つたようである。

「それは寂しいね。」

「仕方ないわ。でもたまにお母さんから手紙がくるの。」

「それならお母さんのところで暮らすのが良いんじゃないの？」

「お母さんたちは一所にはいないみたいで、茨城県やら山梨県やらから手紙はくるの。」

話を聞いてやるせない気持ちになつた。次のバイトの時からは塾で使つてゐるワンランク上の対高校受験用の問題集をコピーして持つて行つた。彼女の実力は相当高いものになつていて通常の教科書では物足りなくなつてゐるはずである。

ある日、いつものように直美の質問に答えていふと、

「明日は休みなんです。先生は？」

「明日は大学の講義が昼からあるだけだね。」

「あのね、ウチ、先生が行つてゐる大学つてところに行つてみたい。どんなところか見てみたいの。」

「そんなの、お安い御用さ。じゃあ、明日、昼前の10時になつて待つていなよ。迎えに来るから」

受験生が、その最後の目標となる“大学”を見たいといつのは少しもおかしい事ではない。今後の自己啓発の一つになればと思ったのだ。

「わあ、大きなオートバイ。なんだか怖くないですか？」
「しつかりつかまっているんだよ。」

「ここのが大学の入口、この岡が全部、大学の敷地でね、春になつたら道沿いにある桜の花が一斉に咲いて、桜の花びらで埋め尽くされてね、きれいなんだよ。」

「見てみたい。」

キャンパス内を問題がない範囲で案内してまわった。

「おー、佐藤。どうしたん? ずいぶん可愛い彼女だなあ。」

「おー、俺の可愛い教え子だよ。4年後には後輩になるぞ。」

直美は冷やかし半分に友人が投げた言葉に、首をすぼめた。

「大学になつたら自分で自分の受けたい授業を選ぶ事ができるんだ。」

「みんな同じ授業を受けるんじゃないの?」

「違うよ。一般的な勉強は高校までほぼ終わり。大学は専門科目に集中して勉強するようになるんだ。」

「先生は?」

「僕は経済学部。直美ちゃんはどちらかと言つと理科系になるんじやないかな。」

「私、頑張つてここに来る。先生たちの後輩になりたい。」

「ははは、直美ちゃんならもつと上の大学に行けるよ。」

そして年が明け、彼女と上の双子が受験する年度になつた。

いつものように双子を教え、食事をもらつていると、

「あー、佐藤君！」

「はい、社長さん、どうしました？」

「今日、三者面談つてのがあってね。確かに佐藤君が来るようになつて、子供たちの成績は少し上がつた。それは認める。しかし、それ以上に川満直美の成績が飛びぬけて良いらしいじゃないか。ええ。どういうことなのかね？うちの子たちにはいい加減に教えて、川満には真剣に教えてるんじゃないのか？」

「直美ちゃん、そんなに成績が上がったんですか？」

「上がつたも何も、クラスで1位、学年でも4位だよ。そんな事、頼みもしないのに。まったく、おもしろくない。」

「そうなんですか。いえいえ、ちゃんと教えてますよ。直美ちゃんは帰り際に質問を1つ2つ答えてやつているだけです。」

「まあ、とにかくだ。さつき、家庭教師センターに電話して先生を変えてもらひつよつに頼んだからね。君はもう来なくて良いよ。」

突然の解雇通告だつた。成績が伸びないのは双子の努力が足らないためだが、何の言い訳も聞く耳を持たないようで、追い出されるよつに帰された。仕方ない。

「先生、、、」

「直美ちゃん」

「じめんなさい。」

「いや、君が気にする事はないよ。僕ら受験生の家庭教師はどのみち受験する1日前までしかみてあげられないんだ。だからもう後、数回しか来れなかつた。ちょっとお別れが早くなつただけさ。」

「今日、進路指導の説明会があつて、第一志望の高校に合格できるつて言つてもらいました。」

「そつか、そつか、それは良かった。だつたら僕的にはもう思い残す事はないよ。」

「、、、、。」

「どうしたの？」

「でも、受けないんです。」

「なんで？どうして？」

「社長さんが、中学を卒業させてやつただけでもありがたいって思えって。」

「そんな、今まで一生懸命勉強してたのに。」

「でも、1年間真面目に働いたら、夜学の高校に行かせてやるって。1年間、ちょっとお休み。」

「そんな、夜学だと高校は4年かかるんだよ。」

「いいの、学校の先生が受けければNH高校に絶対受かるって言つてくれたから、、、ウチの高校受験はもつ終わったの。」

耐え切れず直美の頬に涙がこぼれた。同時に高校受験したら上の双子が世間から比較される事になる。それは仕方ないことなのに、なんて卑劣な、、、と憤りをおぼえるけれど、たつた今解雇になつた身分で、しかも私はこの子の担当の家庭教師ではない。なんの発言権も持たないので。

そんな事があつて、家庭教師のバイトそのものが嫌になり、この件を最後にこのアルバイトを辞める事にした。

ママネチ

4月、大学4年になつた段階で、取得しないといけない単位は16単位、うち8単位はゼミなので事実上3科目、週に2日登校すれば良い状態にあつた。以前から興味があつたいくつかの講義を選んでも週に3日のお気楽カリキュラム。6月には故郷の地元企業への

就職内定ももらっていた。

これから最後の大学生活を楽しむ事になるのだが、遊び代金を親にせがむのも心苦しいのでアルバイトを探した。今度は今までと違う業種の仕事がしてみたかった。学生課に来ていたバイト斡旋票に夕方からの酒屋の配達の仕事があつた。家から距離的に近いという理由で、そこに決めた。

「よへな辺名酒店」は、4台のトラックで近隣の歓楽街を手広く活動している酒屋で、宵の口に社員さんがルートで酒の注文をとつきて、その後出勤したバイトがその伝票を見ながら商品を倉庫や冷蔵庫から積み込み、社員と店を回つて配達する。ちょっと休憩したら手分けして、今日配達した分の集金をしてレジに入れるのが主な業務で、日頃は行かない飲み屋、ステーキハウス、居酒屋、カフェーなどをまわつてあるので初めて経験する事が多い。塾や家庭教師のバイトばかりしていた私には非常に面白いバイトだつた。

一月もすると要領がつかめてくる。メインは やはりビールで、全部の出荷量の半分近い。居酒屋は泡盛（沖縄の焼酎）、ラウンジはカクテルベース、カフェーは洋酒が多く出る。洋酒はそれほど多くはなく、特に輸入洋酒の高級なものはクラブなどの店でも1日に1~2本しか出ないものである。

「佐藤君、『コマネチ』にオールドパー3本、IWハーパー2本、シーバスリーガルは5本ね。」

「はい、僕は初めて行くけど、すごい注文ですね。」

「あの店は現金払いだから、まあ、酒屋からしたら上得意さんだよ。」

その日、そのコマネチの担当社員が体調不良で休みをとつていた。

それで代わりに私とペアの社員が行く事になった。

「う～ん、ここは洋酒だけだから佐藤君は残つて、待つて。」

「え、良いですよ。僕が運びます。」

「そり? うん、だつたら、中で見たことは他言しないでね。」

「「ママネチ」は「波の上繁華街」の入り口にある一軒屋の古い飲み屋で、もう何人も経営者が変わつていい店らしい。なにやら訳ありな様子だが、店内はやや古いクラブの造りで、カウンターにおばさんが一人、客が一人いるだけで、これと黙つて変わつたところはない。」

「なんか、変わつたところがありましたっけ？」

「う～、今日はなかつたね。いいやんいいやん。気にしないで。」

次に私が「ママネチに配達に来たのは、秋になつたばかりのまだ暑い日のことであった。

「さすがに、洋酒が多い「ママネチさんも今日はビールが入つてますね。」

「うん、カウンターの奥に冷蔵庫があるから、そこに中身を出して、裏の土間に空瓶があるから、それと交換で空ケースを置いといて。」

「おはよっ! わこま～す。与辺名酒店でえす。ビールお持ちしましだ～」

カウンターにいたおばさんが、煩いぞと黙つ顔でカウンターの奥を指差す。暗いバックルームに入ると、そこは空調が効いておらず、むつとして蒸し暑い。暗がりに日が慣れてくると、そこは厨房でエプロン姿の若い女性がチャームを作つてゐるよつだ。

「酒屋です。ビールはどこに?」

「そこ」、廊下の冷蔵庫の中に、

「承知しました。ちょっと失礼します。」

その女性の横を通り廊下に進もうとして、気が付いた。この女性はエプロンの下は何も着ていない。下着すらつけていないのだ。エプロンの脇から乳房が見える。思わず足が止まる。目を凝った。私のそんな素振りに女性も動きが止まる。目が合つ。よく見たらまだあどけなさが残る若い十代だと思われた。彼女は首を軽く振つて「騒がないで、見なかつた事にして」と田配せしてきた。前回、社員が店内で見たことは他言無用だと言つていたのは、このことだと直感した。

ビールを冷蔵庫に入れて、空ケースを交換に土間に出了。土間は陽が差さないせいか、雨水や洗濯機のすすぎ水のようなもので濡れて異臭がきつい。物陰には猫だか、大きなねずみだかが蠢いている。

空き瓶を抱えて戻ろうとしたら、土間の横に畳の部屋があつて、そこに裸電球1個の下に何人かのエプロン少女たちが食事をしていた。

「え? な、直美ちゃん?」

その少女たちの中に、なぜかあの直美の姿をみた。

その少女は私の声に顔をあげた。以前に比べたら髪が長くなつたような気がするが、大きな目が印象的な直美に間違いない。

その少女はすぐに立ち上がり、部屋を逃げるように出ていった。後を追おうとしたら、キッチンでチャームを作つていた女性が制して言った。

「追つたらだめ。忘れてあげるのが一番の思いやりよ。」
「そんな！」

振り向いた時に、もう直美と思える少女はいなくなっていた。私は無言のまま店内に戻った。すると事情を察したように、カウンターのおばさんの一人がほくそ笑んで言った。

「兄さん、知り合いかい？なんなら安くしとくよ。ふえつふえつふえつふえつ」
「いえ、そんなんじや、、、、」
「だったら、この事は内緒にしといておくれ。お互いが困らないようですね。」

「Jの店がどういう店なのか瞬時に理解できたが、何故 直美がここにいたかが分からぬ。気持ちが晴れないまま、自宅に戻った。

翌日、気になつて仕方ないので、あの製菓工場に行つてみた。たまたま裏口あたりに見覚えがあるパートさん数人が雑談していた。

「あれ、先生、久しぶりだね。元気にしていたかね？」
「はい、J無沙汰します。今日は、直美ちゃんは？」
「直美ちゃん、、ちょっと、辞めちゃつたんだよ。」
「辞めた？頑張つて働いて高校に行くんだつて言つてましたよ。」
「それは、そうかも知れないけど、あんな事があつたらねえ、、、ここにはいられないよ。」
「あんな事？あんな事つて何ですか？」

そばにいた別のパートさんが、無理やり話に入ってきた。

「とにかく、もうあの子はここにはいないんだよ。 まあ、みんな、仕事に戻ろう。」

やはり、何かあったようだが、この件には触れたくないようで、仕方なくバイクのところに戻ると、後ろから声がかかった。

「先生、あんた、直美ちゃんの勉強をみてくれてたんだろう？ 直美ちゃんがしきりに感謝していたよ。」

「ええ、それで気になっていたんですよ。何があつたんです？」

「あれはまだ4月になつたばかりだったよ。あたしら、早番の時に、出勤してたら更衣室から裸の直美ちゃんが泣きながら逃げ出してきたんだよ。」

「えー。」

「そんでもって、更衣室にはこの社長がいてね。何をされたのか想像できるつてもんよね。」

「だったら、直美ちゃんは被害者じゃないですか。」

「それが、社長が言つにまつて、相談にのつていたら直美の方が誘つてきたつて言つんだよ。」

「そんな話を誰が信じるんですか？」

「誰も信じちゃいないさ。でもね、社長に逆らつと、この不景気な最中、あたしら高齢者にはパートでもそつそつ働き口はないものね。」

「

憤りで体中の血が逆流するのが分かつた。とにかく、一刻も早く直美を保護してやらねばと焦る。バイト先の酒店に向かつた。しかし、直美の唯一の手がかりは途絶えていた。

「佐藤君、『マネチのお女将から電話でね、昨日の女の子が今朝からいなくなっているらしいんだよ。君、知らないか？』

「なんですか？ どうして？」

「知らないみたいだね。ふつむ、そろそろあの店とは縁を切つておいた方が良さそうだね。」

店主の読み通り、それから1ヶ月もしないうちに警察の捜査が入り、「マネチは少年法および売春防止法で検挙され閉店し、直美の行方はまったく分からなくなつた。そんな事があつても時間だけは過ぎてゆく。年が明け、私は卒業して故郷に戻り、直美の記憶は薄れていつてしまつた。

遅咲桜

姉御の結婚式は那覇から少し離れた海岸にあるセレモニー・ホールで行われた。笑いあり、涙ありの内容があるので楽しく時間が過ぎていた。「姉御」と呼ばれるにはそれなりに意味があつて、姉御が高校生の時に、交通事故で母親を亡くしてしまつたのだ。父親にも重い後遺症が残り、父親の介護やまだ幼い弟たちの面倒を見るために3年ほど大学進学が遅れたのだった。

「姉御。おめでとう。良かつたな。良い人そうじゃない？」

「へへへ、当たり前だろ。この私のメガネに適う男はそうそういうなによつて。」

「うん、本当に良かつた。」

「あ、それでね、2次会も来るだろ？那覇に戻つて2次会するからね。」

「おう、今日はとことん付き合つよ。」

「そう言えば、嶺井が2次会にお前に紹介したい人がいるから、2次会に連れてきて良いかつて訊くから承知しておいたよ。」

「そう？誰だらう？」

直感で直美ではないか?と感じた。それまでの楽しい気持ちから、2次会で会うことになるその人に緊張に似た期待がふくらんだ。その事が気になつて、2次会の乱痴気騒ぎに心酔できないでいたら、嶺井が寄ってきた。

「お前にぜひ会いたいという人がいて、今日 姉御の結婚式で沖縄に来ていると伝えたら、今 この店の向かいの喫茶店に来ているんだよ。会つてやれないかな?」

「直美ちゃんかい?」

「いや、旦那さんのタンさん、台湾人だ。台湾の輸入家具の店を那覇を中心につくつと展開されてる。その融資の件で俺と接点があつたんだ。」

「台湾の人? ふうむ、 、 、 」

「良い人だよ。奥さんと一緒にタンさんもこの春、俺らの後輩になるんだよ。もう三十歳は越してると思うけれど、立派な人やと思うよ。」

「え? 後輩になる? どういうこと?」

「聞きたいやろ? へへ、俺はこのタンさんが個人的に好きなんだよ。人間的に魅力のある人でね。その人が選んだ奥さんとお前が学生時代に接点があつたことが俺は嬉しいんだ。」

「くすくす、変わってるな、お前。いいよ。行こうか。」

呼ばれていつた喫茶店の奥の席にその男は待つていた。ずいぶんと大きな男で、顔は浅黒くあごが角ばついていて、どうにも厳つい雰囲気である。嶺井と一緒に現れたので、私が佐藤だと思ったのだろう。席に近づいたら立ち上がりて深くおじぎをして、見た目とはかなり違う印象の笑顔で挨拶した。

「はじめまして、ワタシ、タンと言います。突然お呼び立てしたり

して、すみません。よく来てくださいました。」

「はじまして、佐藤です。どうぞ、お座りください。」

「ワタシ、妻の直美から佐藤さんの事をよく聞いていました。一度会つてみたいと思っていました。会えて嬉しいです。」

「ちょっとイントネーションがおかしいけれど、日本語は達者なようである。彼は自國で商売にある程度の成功を収めて、その延長で沖縄に事業拡大が目的で乗り込んできていたらしい。若手の青年実業家と言つところだらう。」

「ワタシが直美に始めてあつたのは、接待で役人を特殊浴場に連れてきていた時でした。ワタシについた女性が直美で、ワタシは非常に違和感を覚えました。彼女は理知的で話す事柄が興味深くて楽しい。内面が豊かな印象で、普通なら そう言うところにはいない感じの女性で、そう言つところにワタシ魅力を強く感じました。」

「そうですか。特殊浴場で働いていましたか。」

「はい、でも佐藤さん、お金もない住むところも保証人もいない状態で、女が一人で生きていくには仕方ない事だと思いますよ。」

「ふむ、そうですね。誰も彼女をすぐつてはくれませんでしたものね。」

「ワタシ、通いました。来る日も来る日も。そしたら10日目に『もう来るな』と言われてしまつました。」

「毎日ですか？」

「はい、しかも10日間、ワタシ、サービスを受けてませんでしたから、サービス料金をもらつてくれなかつたんです。はい、彼女に迷惑かけたと思いました。それで、食事に誘いました。」

「きっと、豪華なディナーでしょうね。」

「はい、そのつもりでレストランを予約していたのに、直美は自分のアパートで自分の作った料理を出してくれました。グルクンと言

う魚を揚げただけ、それにご飯と味噌汁の普通の食事でした。私は夢があつて今の仕事をしているから私にかまうなと言われました。私はますます彼女が好きになり、彼女の夢と一緒に追いかけてみたいと思いました。」

「彼女の夢、、、なんだろう?」

「はい、ご存知かもしだれませんが彼女は事情があつて親と分かれ、離れて暮らしていました。それでちゃんと仕事をして、親を探して一緒に住むのが彼女の夢だつたんです。そのために、ちゃんとしました企業に入社できるように大学に行きたかったんですね。私と知り合つたときには既に大検に合格していて、高校には行けなかつたけれど大学受験の資格を取得していました。」

「大検を、、、そうですか。」

「はい、絶対に佐藤先生の後輩になるつて約束したらしいですからね。」

「そんなことまで覚えていたんですか。」

直美はあの製菓工場を着のみ着のままで追い出され、行く当てもないまま那覇の街をさまよい、流れ着いたのが夜の繁華街だつたわけである。その事を誰が非難できようか、未成年の少女がたつた一人で、生きてゆく糧を得る方法なんてそんなにいくつもあるはずもない。それがどんなに辛かつたことなのかは想像するに余りある。

「ワタシ、直美を自分の会社に社員として入れました。彼女が20歳になつたばかりの時で、彼女は驚くほどよく働きました。最初は事務員としてでしたが、彼女は仕事の能力が高いので、秘書にしました。正解でした。」

「彼女は努力家でした。私は工場にいたときしか知りませんが、若いのに入望もありましたね。」

「はい、ますます、ワタシ、気に入りました。それでプロポーズしました。10歳近く差があるんですが、ワタシまだ独身でしたから

資格はありますね。」

「返事は？」

「条件付でOKでした。」

「条件？どんな条件なんですか？」

「はい、仕事しながらでいいから、大学に行かせて欲しいと言いました。彼女の大学に行く目的は就職でしたから、ワタシの会社に入つた事で進学の意味はないはずだったのだけれど、佐藤先生との約束が残つていたのです。彼女は夜の街で泥をなめながら生きてきました。でも心が折れなかつたのは佐藤先生との約束があつたからです。ワタシ、感動しました。」

「。。。そうですか。」

「この春、ワタシと直美、きちんと受験して合格しました。4月から大学生です。一緒に直美の夢を果たせました。ありがとうございました。」

「いいえ、私は何もしていません。あなた方のそばを少しだけ通りかかつただけです。でも、本当に良かつた。直美さんを大切にしてあげてください。」

「面会人は帰つたの？」

「うん、6年前の沖縄に残していたモヤモヤがすつきり、きれいに晴れたよ。」

「なんだか分からぬけど、嬉しそうね。」

そこに一陣の夜風、路肩に吹きたまつた桜の花びらが舞い上がつた。

「姉御は3年遅れで入学してきたんだつけね？」

「そうよ。入学も3年遅れ、卒業も3年遅れ、就職も3年遅れたわ。」

「

「はあ～、でも結婚は3年以上遅れたんじゃない？もひみ〇歳になるんじゃないのかね？」

「ばかー！誕生日は来月じゃ。29歳のうちに結婚したかったから今月、無理に式をあげてるんよ。乙女心を分からんのかー。」

沖縄の桜は日本で一番早く開花する。しかし、じく稀になかなか開かないつぼみがある。何年も遅れてようやく開いたその花は、どの花びらよりも美しく誇らしげに咲くことを私は知っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7384d/>

桜花

2010年10月9日03時23分発行